

# 第1章 電子回路の基礎知識

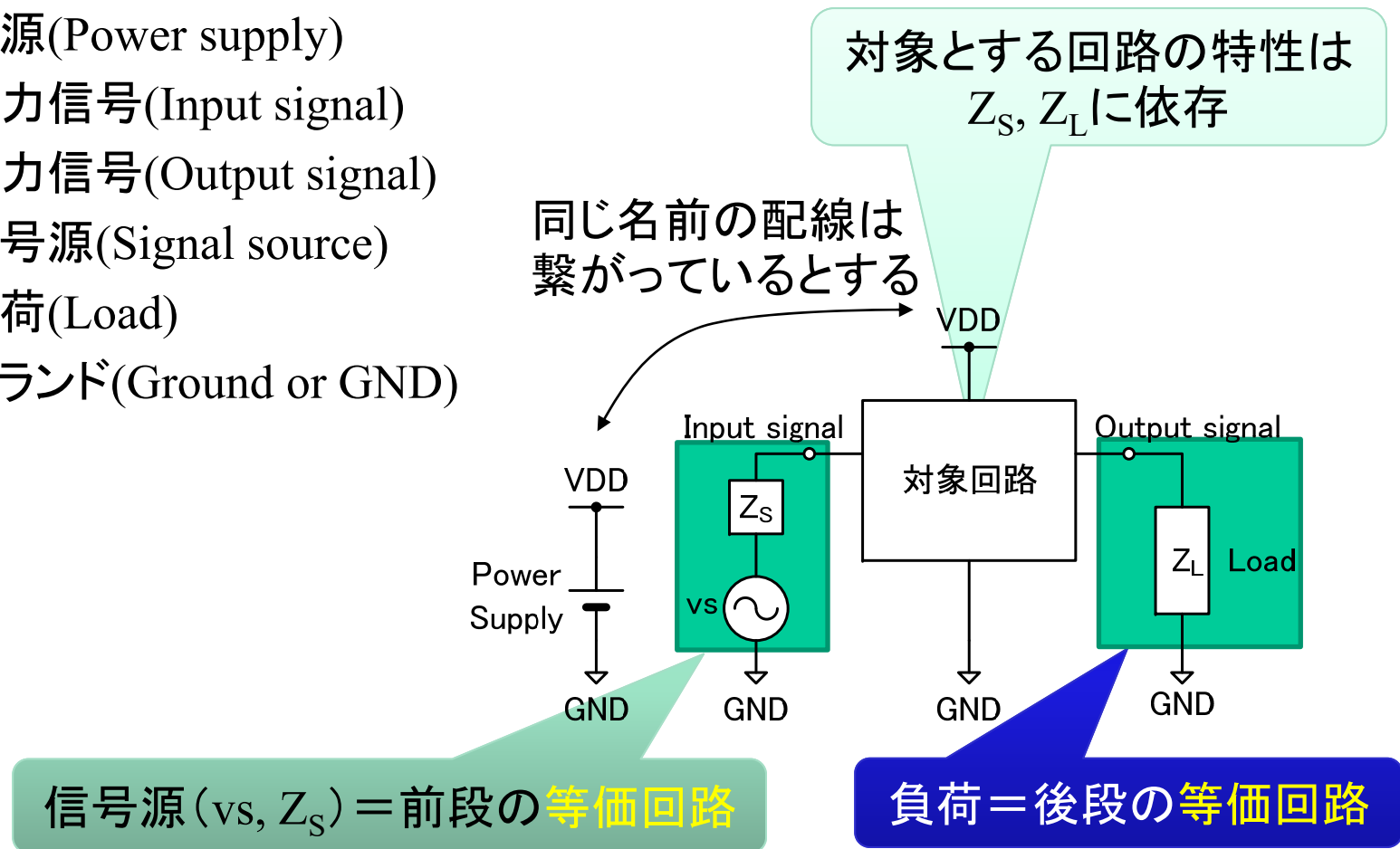
回路の基本法則と信号の表現

線形回路と非線形回路の違い

# 1.1 電子回路の基本定理

# 回路解析の基本要素

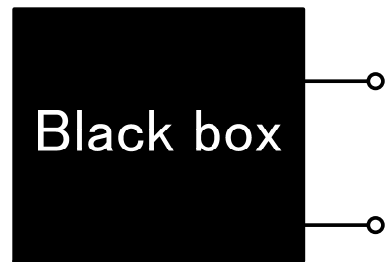
- 電源(Power supply)
- 入力信号(Input signal)
- 出力信号(Output signal)
- 信号源(Signal source)
- 負荷(Load)
- グラウンド(Ground or GND)



# 等価回路の必要性

- 回路解析はシステム全体で行う必要がある
  - 回路特性は、入力信号と負荷に依存する
  - 入力信号、負荷もまた電子回路または電子部品である
  - 入力信号、負荷の回路特性も、その入力信号と負荷に依存している
  - 従って、厳密には、システム全体で回路解析をしなければ回路の動作保証はできない
- 回路解析を部分回路で行うための方法
  - 部分回路で解析を行うために、入力信号と負荷を等価回路(近似)で表す

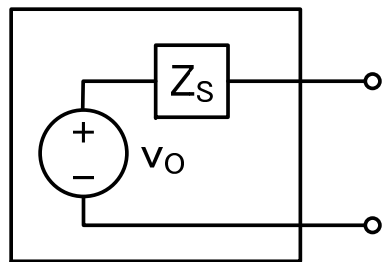
# 等価回路(Equivalent circuit)の定理



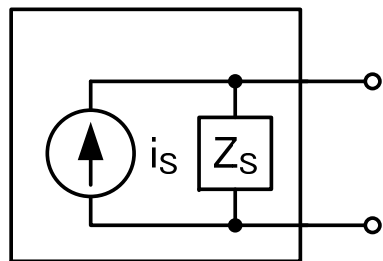
測定  
→

開放電圧 =  $v_O$   
短絡電流 =  $i_S$

||



or



テブナンの定理より

$$Z_S = \frac{v_O}{i_S}$$

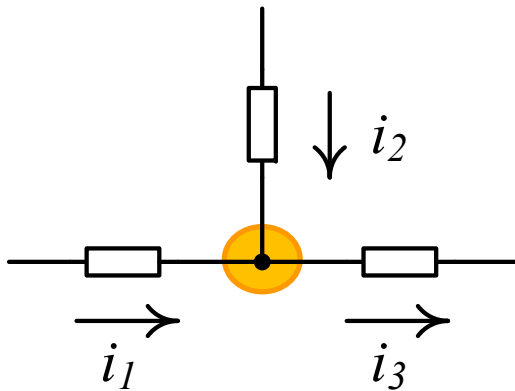
ノートンの定理より

$$Z_S = \frac{v_O}{i_S}$$

ただし、内部の素子のI-V特性が全て線形の場合に成立

# 回路の基本法則

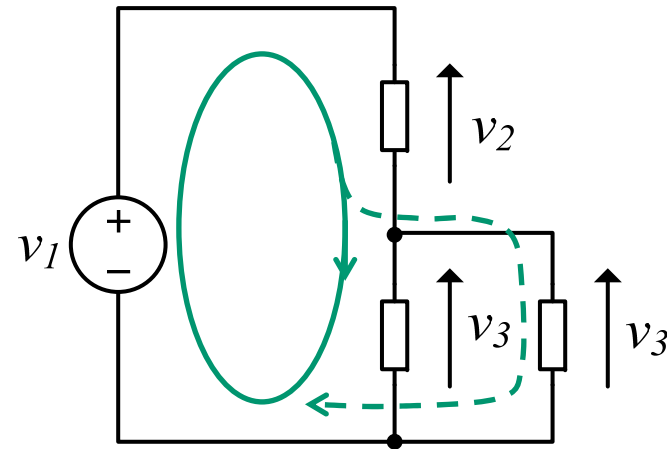
キルヒホッフの第1法則  
(Kirchhoff's Current Law)



$$i_1 + i_2 - i_3 = 0$$

(任意のノードに対して成立)

キルヒホッフの第2法則  
(Kirchhoff's Voltage Law)

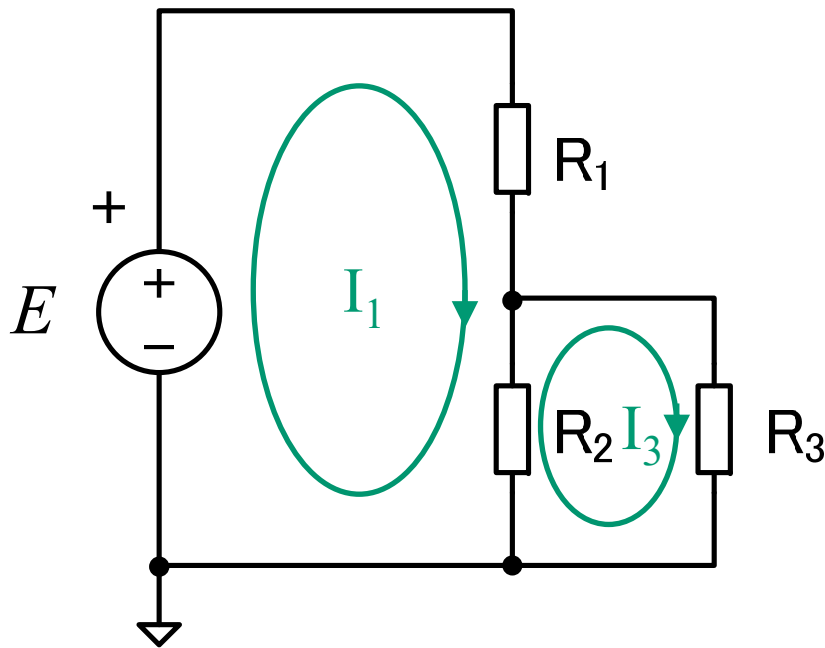


$$v_1 - v_2 - v_3 = 0$$

(任意のループに対して成立)

# ループ電流法(Mesh Current Method)

キルヒホッフの第1、第2法則を組み合わせた簡単な回路方程式の作り方



全てのメッシュに時計回りのループ電流を割り当て、下記の回路方程式を作る。

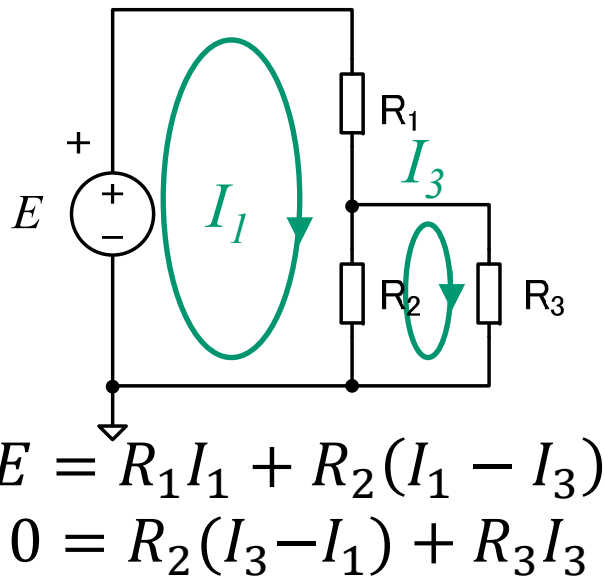
$$E = R_1 I_1 + R_2 (I_1 - I_3)$$

$$0 = R_2 (I_3 - I_1) + R_3 I_3$$

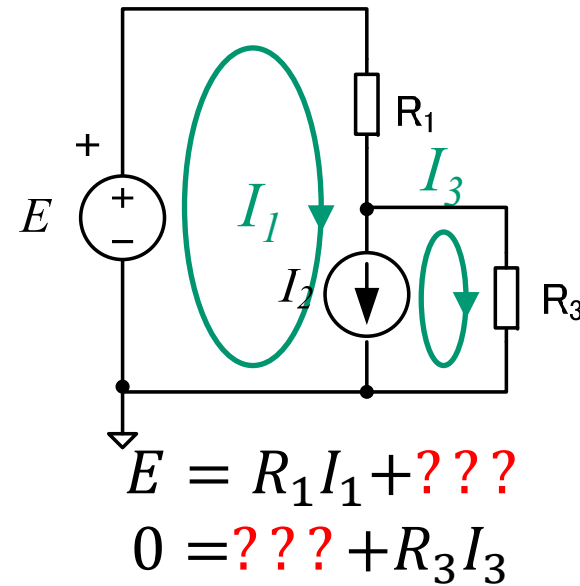
# 電流源を含む回路方程式1

電子回路で扱うデバイスは電流源と等価な特性を示すため、電流源を含む回路方程式にも慣れておく必要がある。

電流源を含まない回路



電流源を含む回路



電流源の電圧はどうする？



# 電流源を含む回路方程式2

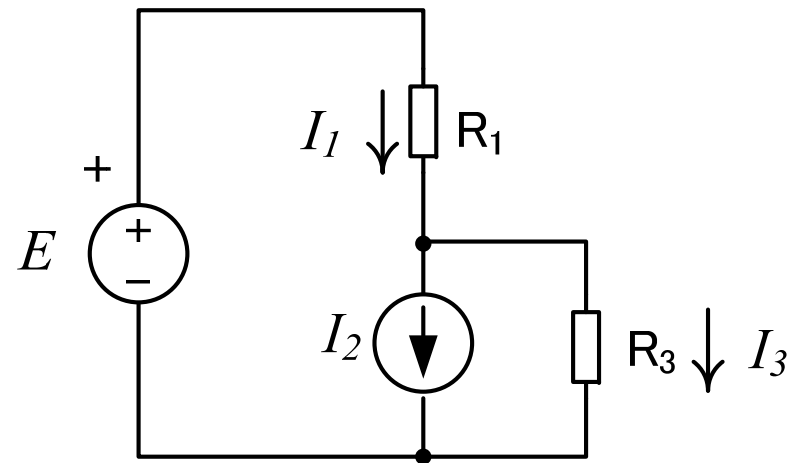
## 方針

1. ループ電流を使用しないで、各素子に電流変数を割り当てる
2. キルヒホッフの法則を両方使う

$$\begin{cases} I_1 - I_2 - I_3 = 0 & \text{第1法則} \\ E = R_1 I_1 + R_3 I_3 & \text{第2法則} \end{cases}$$

$$\begin{aligned} E &= R_1 I_1 + R_3 (I_1 - I_2) \\ E + R_3 I_2 &= (R_1 + R_3) I_1 \end{aligned}$$

(電流源の電圧は変数なので、ループ電流法だけでは解けない)



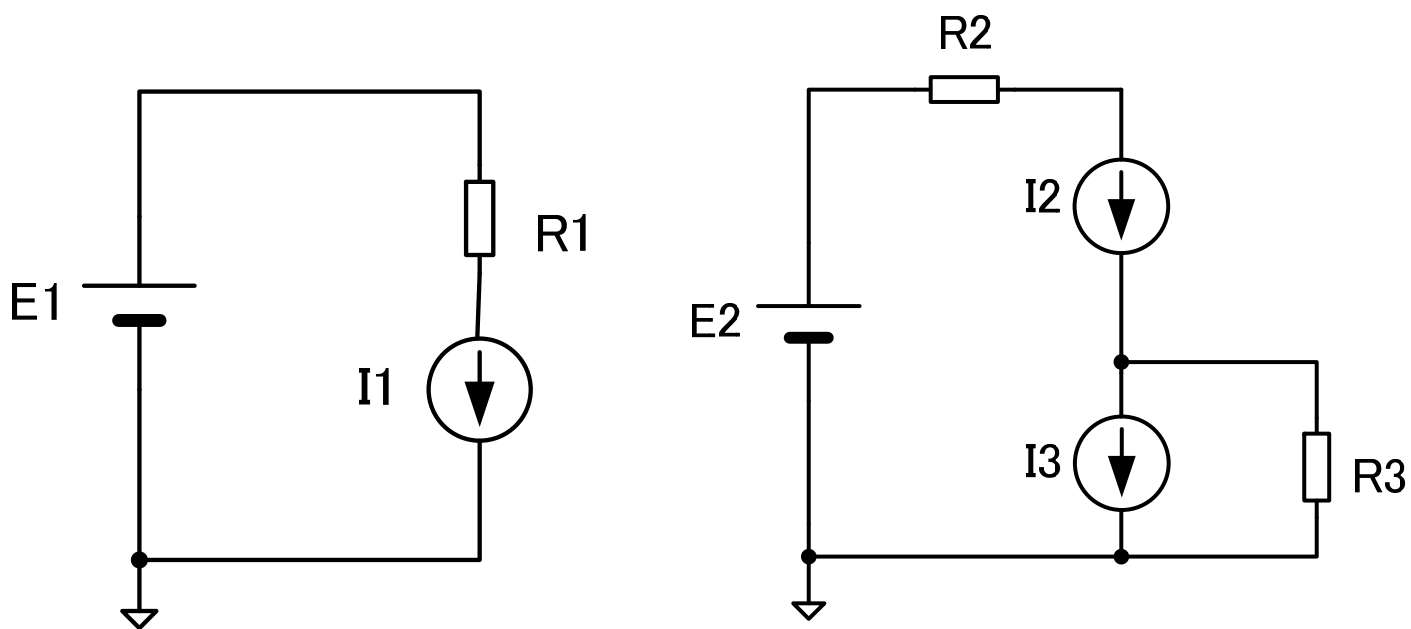
$$I_1 = \frac{E + R_3 I_2}{R_1 + R_3} > 0$$

$$I_3 = I_1 - I_2 = \frac{E - R_1 I_2}{R_1 + R_3}$$

不思議。 $I_3$ は負になる場合もある

# クイズ

下記の回路について回路方程式を作成しなさい。



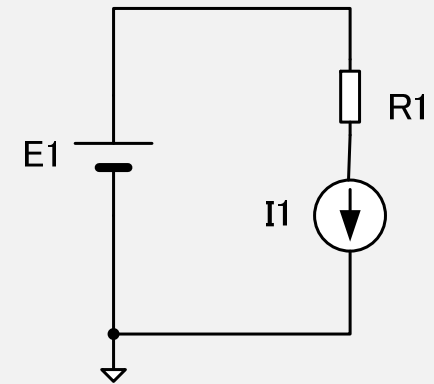
# クイズの解答

## 左の回路

未知変数は電流源I1の電圧。  
方程式は1個必要。

電流源I1の電圧を $V_{I1}$ とおく。

$$E1 = R1 \cdot I1 + V_{I1}$$



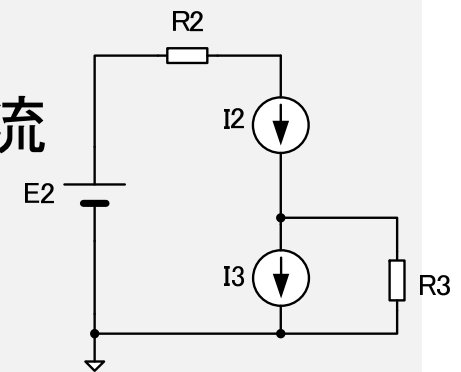
## 右の回路

未知変数は電流源I2の電圧とR3に流れる電流。方程式は2個必要。

電流源I2の電圧を $V_{I2}$ 、R3に流れる電流を $I4$ とおく。

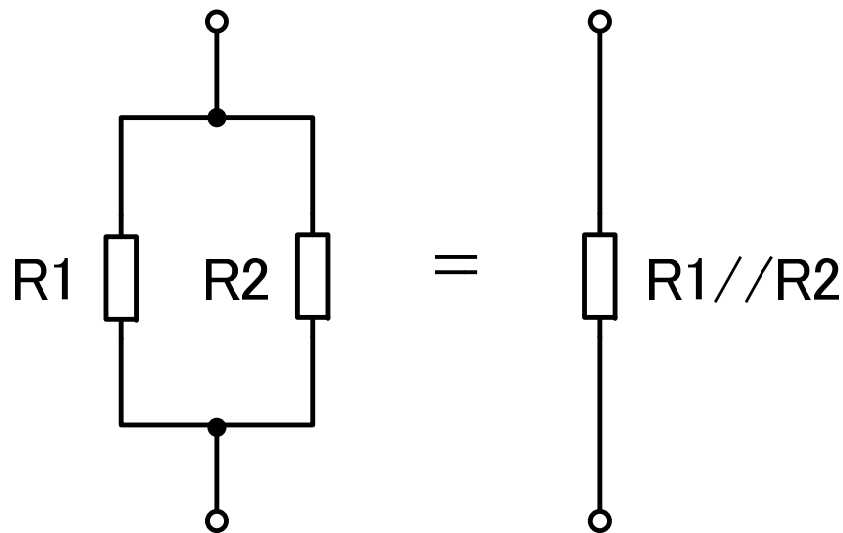
$$E2 = R2 \cdot I2 + V_{I2} + R3 \cdot I4$$

$$I2 = I3 + I4$$



# インピーダンスの並列接続演算

電子回路では、インピーダンスの並列接続を表すため記号 // を多用するので慣れておこう。



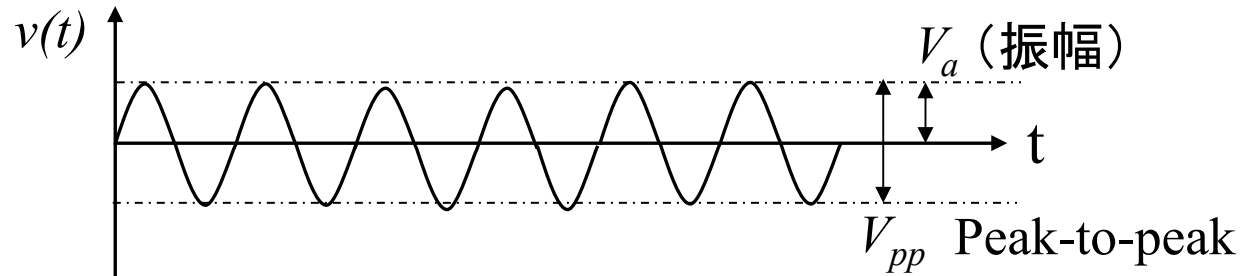
$$R1//R2 = \frac{1}{\frac{1}{R1} + \frac{1}{R2}} = \frac{R1 \cdot R2}{R1 + R2}$$

各コンダクタンス $G_1, G_2$ を用いると

$$G_1 = \frac{1}{R1}, G_2 = \frac{1}{R2} \quad \text{より}$$

$$R1//R2 = \frac{1}{G_1 + G_2}$$

# 振幅の表現



瞬時値 (Instantaneous value)

$$v(t) = V_a \sin \omega t$$

実効値 (RMS: Root Mean Square)

$$V_{RMS} = \sqrt{\frac{1}{T} \int_0^T v(t)^2 dt} = \sqrt{\frac{1}{T} \int_0^T (V_a \sin \omega t)^2 dt} = \frac{V_a}{\sqrt{2}}$$

電子回路では、交流電圧の大きさを  $V_a$  (振幅)、 $V_{pp}$  (Peak-to-peak)、 $V_{RMS}$  (実効値) で表す場合があるので注意が必要。

ACコンセントは、 $V_{RMS} = 100\text{V}$  ( $V_a = 141.4\text{V}$ )。

# (参考)一般波形のRMS

正弦波の平均値 (Average)

$$V_{AVG} = \frac{1}{T} \int_0^T |v(t)| dt = \frac{1}{T} \int_0^T |V_a \sin \omega t| dt = \frac{2}{T} \int_0^{\frac{T}{2}} V_a \sin \omega t dt = \frac{2}{\pi} V_a$$

正弦波の実効値と平均値の関係

$$V_{RMS} = \frac{V_a}{\sqrt{2}} = \frac{\pi}{2\sqrt{2}} V_{AVG} \quad (1.1) \quad (\text{注: 一般波形では成り立たない})$$

一般波形の実効値 (真の実効値)

$$V_{RMS} = \sqrt{\frac{1}{T} \int_0^T v(t)^2 dt} = \frac{\sqrt{\sum_n V_n^2}}{\sqrt{2}} \quad (1.2) \quad (V_n \text{は各周波数成分の振幅})$$

電圧計、電流計は、RMS値を表示しているが、式(1.1)で求めているものと、式(1.2)で求めているものがある。式(1.2)で求めている場合は、「**真の実効値表示**」と呼ばれる。

# 信号の複素数表記

## オイラーの公式

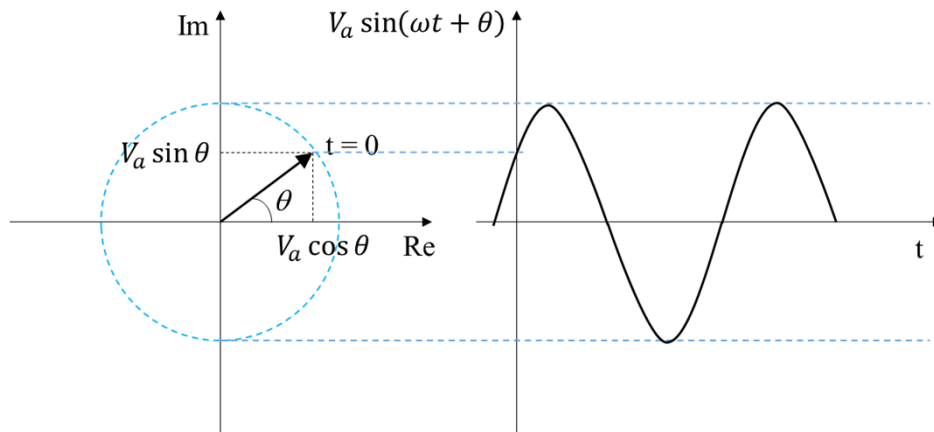
$$V(t) = V_a \{ \cos(\omega t + \theta) + j \cdot \sin(\omega t + \theta) \} = V_a e^{j(\omega t + \theta)}$$



位相と時間を分離

$$\begin{aligned} V(t) &= V_a e^{j(\omega t + \theta)} = V_a e^{j\theta} e^{j\omega t} \\ &= V_a \{ \cos\theta + j \cdot \sin\theta \} e^{j\omega t} = \sqrt{2} V_c e^{j\omega t} \end{aligned}$$

振幅と位相を合わせた複素平面上的ベクトル



通常、複素数表記では時間の指数関数を外して  $V_c$  だけを表記する。

$V_c = V_a e^{j\theta} / \sqrt{2}$  は複素ベクトルと呼ばれる。(振幅の大きさ  $|V_a|$  は、複素ベクトルの大きさ  $|V_c|$  の  $\sqrt{2}$  倍になるので注意)

# 微分・積分演算の簡単化

## 複素数表示された信号

$$V(t) = V_a(\cos\omega t + j \cdot \sin\omega t) = V_a e^{j\omega t}$$

## 時間微分

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt} V(t) &= \omega V_a(-\sin\omega t + j\cos\omega t) = \omega V_a \left\{ \cos\left(\omega t + \frac{\pi}{2}\right) + j\sin\left(\omega t + \frac{\pi}{2}\right) \right\} \\ &= \omega V_a e^{j(\omega t + \frac{\pi}{2})} = \omega V_a \left( \cos\frac{\pi}{2} + j\sin\frac{\pi}{2} \right) e^{j\omega t} = j\omega V(t) \end{aligned}$$

時間微分 = cos, sin関数の位相が90度進む =  $j\omega$ を掛ける

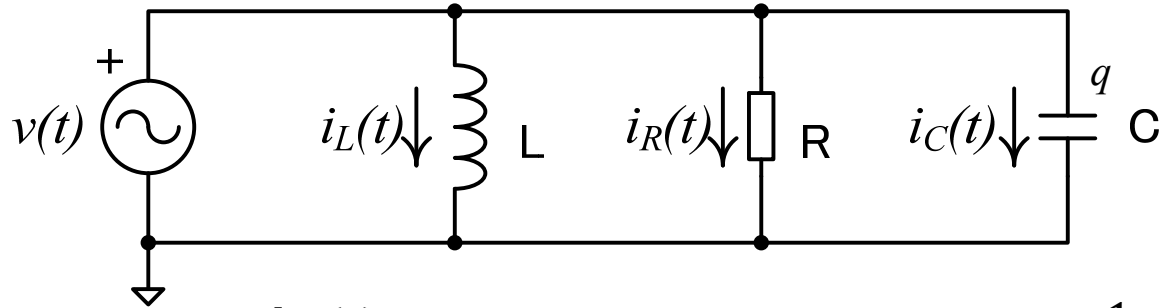
## 時間積分

$$\begin{aligned} \int V(t) dt &= \frac{V_a}{\omega} (\sin\omega t - j\cos\omega t) = \frac{V_a}{\omega} \left\{ \cos\left(\omega t - \frac{\pi}{2}\right) + j\sin\left(\omega t - \frac{\pi}{2}\right) \right\} \\ &= \frac{V_a}{\omega} e^{j(\omega t - \frac{\pi}{2})} = \frac{V_a}{\omega} \left( \cos\left(-\frac{\pi}{2}\right) + j\sin\left(-\frac{\pi}{2}\right) \right) e^{j\omega t} = \frac{1}{j\omega} V(t) \end{aligned}$$

時間積分 = cos, sin関数の位相が90度遅れる =  $j\omega$ で割る



# RLC回路方程式の線形性



$$v(t) = L \frac{di_L(t)}{dt}$$

$$v(t) = Ri_R(t)$$

$$v(t) = \frac{1}{C} q(t) = \frac{1}{C} \int i_C(t) dt$$

$$i_L(t) = \frac{1}{L} \int v(t) dt$$

$$i_R(t) = \frac{1}{R} v(t)$$

$$i_C(t) = \frac{dq(t)}{dt} = C \frac{dv(t)}{dt}$$

複素数表示



複素数表示



複素数表示



$$I_L(t) = \frac{1}{L} \int V(t) dt = \frac{1}{j\omega L} V(t)$$

$I_L$ ,  $V$ の複素数振幅が比例  
( $I_L$ の位相は遅れる)

$$I_R(t) = \frac{1}{R} V(t)$$

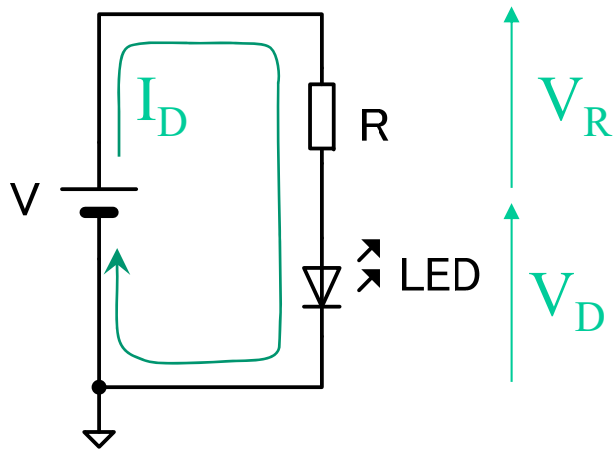
$I_R$ - $V$ が比例  
(位相は同じ)

$$I_C(t) = C \frac{dV(t)}{dt} = j\omega CV(t)$$

$I_C$ ,  $V$ の複素数振幅が比例  
( $I_C$ の位相は進む)

# 非線形回路方程式

$I_D$ を求めよ。



$$\begin{cases} V = V_R + V_D \\ V_R = RI_D \\ I_D = I_S(e^{\frac{q}{nkT}V_D} - 1) \end{cases}$$

$$I_D = I_S(e^{\frac{q}{nkT}(V-V_R)} - 1) = I_S(e^{\frac{q}{nkT}(V-RI_D)} - 1)$$

この方程式は、 $I_D$ が解けない。従って $V_D$ ,  $V_R$ も解けない。

# 1.1節のまとめ

- Rの回路方程式は、交流、直流に関係なく解ける
- RLCの回路方程式は、交流に対して線形方程式であり、交流に関して解ける( $\omega \rightarrow 0$ の極限として直流も解ける)
- 非線形な特性の素子を含む回路方程式は一般的に解けない



近似または数値シミュレーションが必要

伝達関数と周波数特性

## 1.2 信号と回路特性の表現

# 信号と情報

電子回路が扱う信号形態

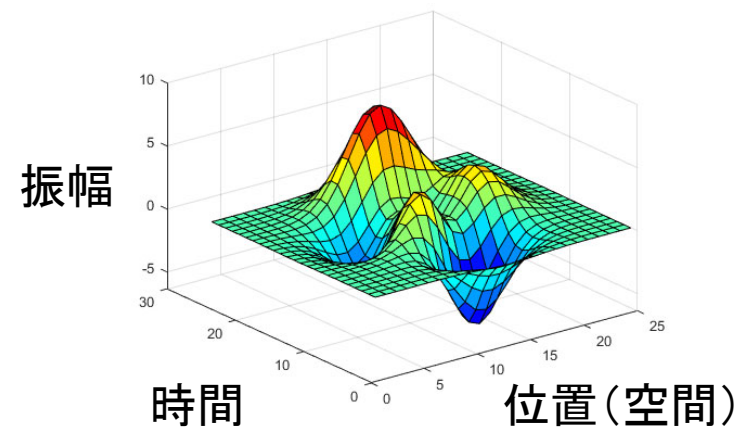
周波数 (角周波数)	位相	振幅
電圧	電荷	電流
ビット列またはベクトル	パルス幅	パルス密度

変換

信号(情報の物理表現)  
空間と時間の関数

情報(信号、構造、記号などを含む表現)

空間と時間の関数に限らない



# 前スライドの専門用語

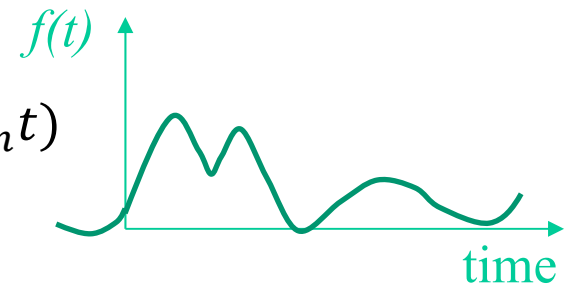
Frequency:	周波数
Angular frequency:	角周波数
Phase:	位相
Amplitude:	振幅
Charge:	電荷
Pulse width:	パルス幅
Number of pulses:	パルス数

# 信号の表現

時間領域信号

時間  $t$

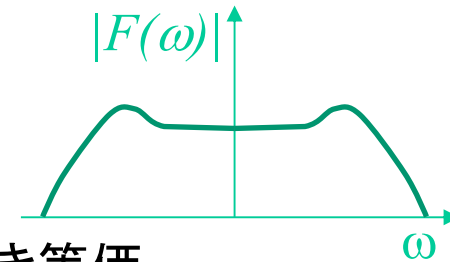
$$f(t) = \sum_{n=0}^{\infty} (b_n \cos \omega_n t + a_n \sin \omega_n t)$$



フーリエ変換

角周波数  $\omega$

$$F(\omega) = \int_{-\infty}^{\infty} f(t) e^{-j\omega t} dt$$



$\sigma = 0$  のとき等価

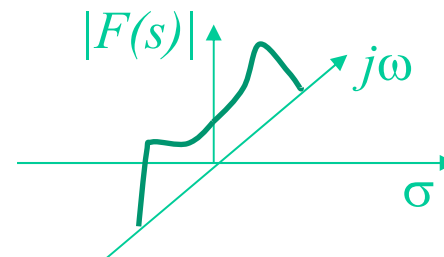
ただし周期波形の場合 (位相と振幅が時間の関数ではない)

ラプラス変換

ラプラス変数  $s$

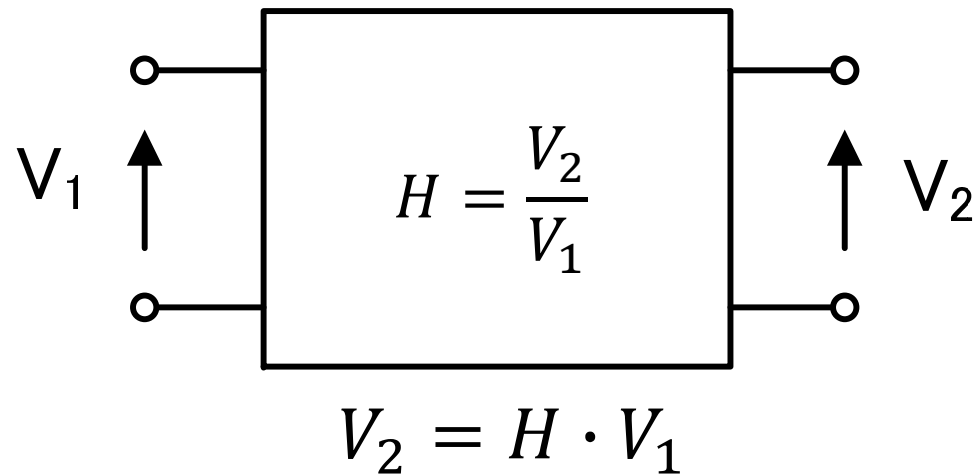
$$s = \sigma + j\omega$$

$$F(s) = \int_{-\infty}^{\infty} f(t) u(t) e^{-(\sigma + j\omega)t} dt = \int_0^{\infty} f(t) e^{-(\sigma + j\omega)t} dt$$



# 回路特性の表現

信号を電圧で表す場合



上記のように表せると、回路特性が伝達関数 $H$ だけで表せて便利だが、時間変数(微分、積分方程式)のままでは表せない。しかし、線形回路の場合、一旦 $\omega$ または $s$ 変数に変換すると、 $H$ を求めることができる。非線形回路は、一般的には $H$ を求められない。なお、伝達関数は、信号処理の内容を表す関数である(詳しくは信号処理の科目で学ぼう)。



# 伝達関数 (Transfer function)

- LCRの回路方程式は複素電流振幅と複素電圧振幅の関係が線形なので、代数方程式として入力-出力の関係をあらわす伝達関数Hを求めることができる
- 一方、半導体素子は非線形特性を持つので、代数的に解けない(非線形性を回避する方法は後で説明)

周波数伝達関数 ( $\omega$ 変数)

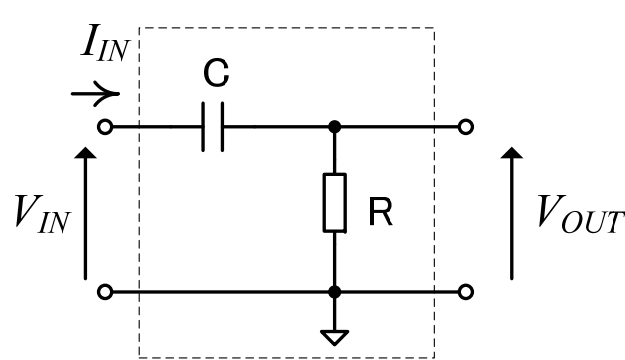
通常の伝達関数 ( $s$ 変数)

$$H(\omega) = \frac{V_{OUT}(\omega)}{V_{IN}(\omega)} \quad \xleftarrow{s = j\omega (\sigma = 0)} \quad H(s) = \frac{V_{OUT}(s)}{V_{IN}(s)}$$

$j\omega$ 軸上の有理関数(複素数)

$s$ 平面上の有理関数(複素数)

# 伝達関数の計算例



$$\begin{cases} v_{in}(t) = \frac{1}{C} \int_0^{\infty} i_{in}(t) dt + R i_{in}(t) \\ v_{out}(t) = R i_{in}(t) \end{cases}$$

↓  $\mathcal{L}$

( $t=0$ において、 $q=0, i_L=0$ とすると、複素ベクトルの計算と同じ。)

$$\begin{cases} V_{IN}(s) = \frac{1}{C} \left( \frac{I_{IN}(s)}{s} + \frac{q(t=0)}{s} \right) + R I_{IN}(s) = \left( \frac{1}{sC} + R \right) I_{IN}(s) \quad , q(t=0) = 0 \text{ とする} \\ V_{OUT}(s) = R I_{IN}(s) \end{cases}$$

複素ベクトルの計算方式でも同じの伝達関数が得られる

$$H(s) = \frac{V_{OUT}(s)}{V_{IN}(s)} = \frac{R}{\frac{1}{Cs} + R} = \frac{sRC}{1 + sRC} \xrightarrow{s=j\omega} H(\omega) = \frac{V_{OUT}(\omega)}{V_{IN}(\omega)} = \frac{j\omega RC}{1 + j\omega RC}$$

分子、分母を $(1 \pm sX)$ や $(1 \pm j\omega X)$ の形に式変形するのがコツ(後述)

# ポールとゼロ (pole and zero)

$$H(s) = \frac{a \cdot s + b}{s + c} \quad (a, b, c = \text{実数})$$

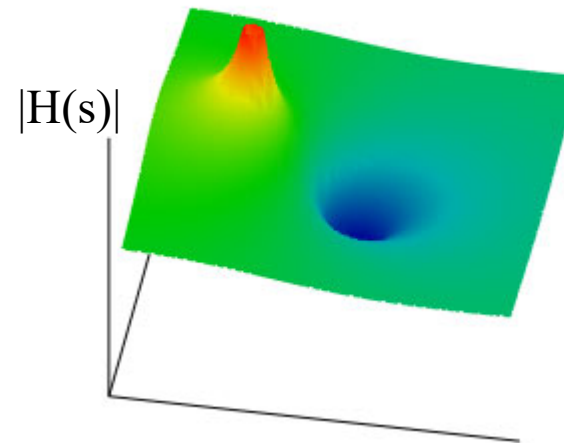
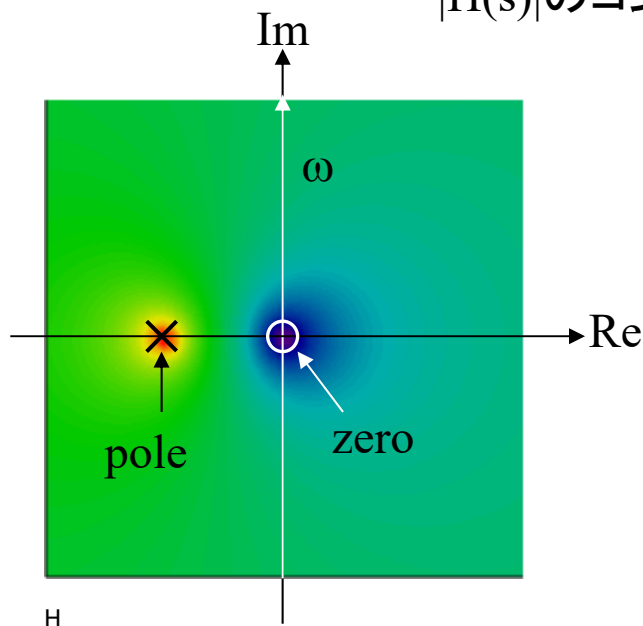
$|H(s)| = 0$  の点を**ゼロ(Zero)**  
 $|H(s)| = \infty$  の点を**ポール(Pole)**

} と呼ぶ

伝達関数の形

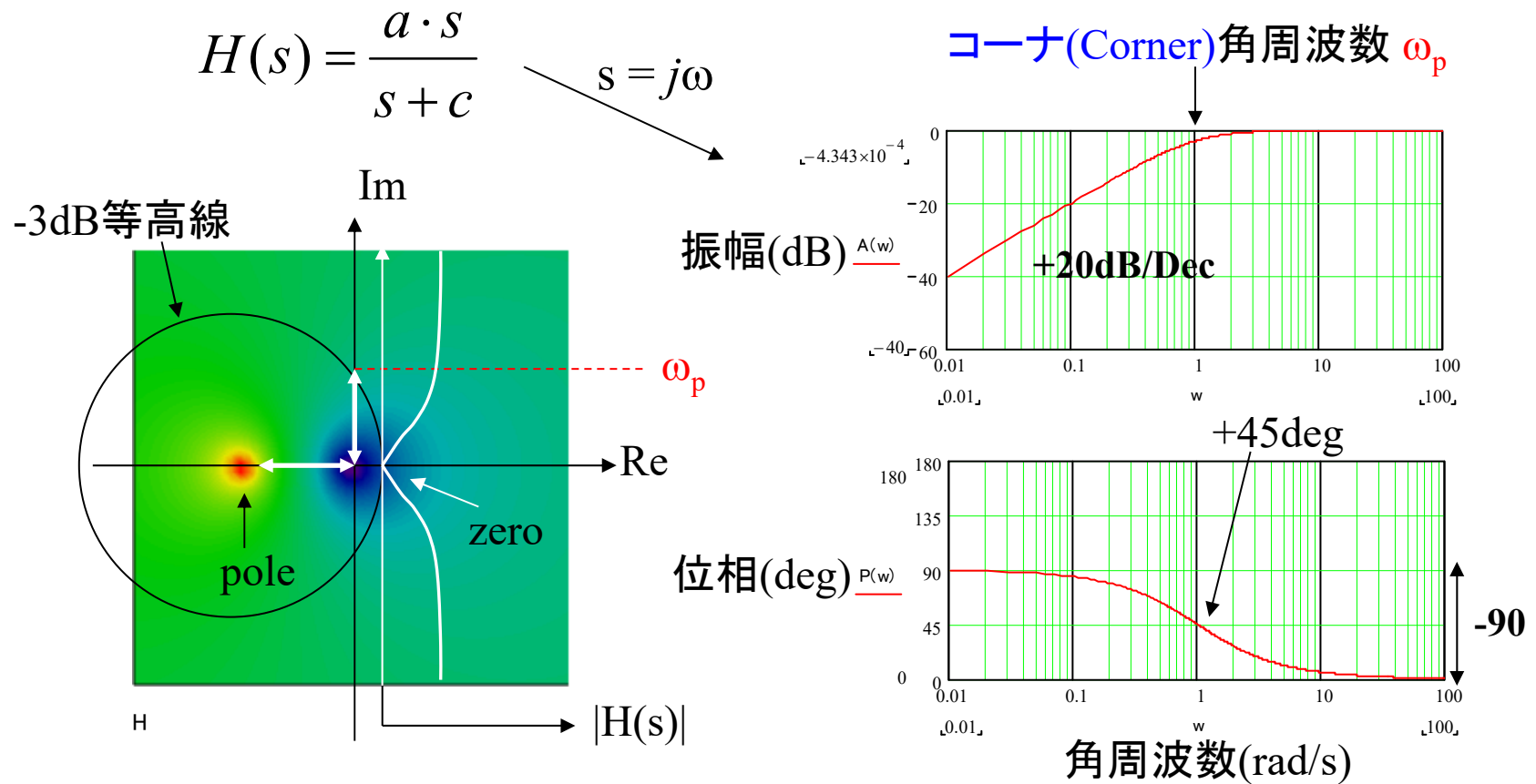
$a = 0, \quad b \neq 0$	LPF型
$a \neq 0, \quad b = 0$	HPF型

$|H(s)|$ のコンターマップ(Contour map)



# ボート線図 (Bode diagram)

周波数伝達関数の特性を振幅と位相で表したものがボート線図



ポールやゼロがあるとボート線図にコーナが発生する

# デシベル

ボーデ線図の縦軸は、通常、デシベル(dB)で表示される。  
デシベルは、値の絶対値の比(信号の場合は振幅の比)を表す表記法である。

信号電圧、信号電流のデシベル  $dB = 20 \log_{10} \left| \frac{V_2}{V_1} \right| = 20 \log_{10} |H(\omega)|$

信号電力、雑音電力のデシベル  $dB = 10 \log_{10} \left| \frac{P_2}{P_1} \right|$

↑  
電力の場合は、10になることに注意

(参考) 無線通信などで使用される  $dBm$ (ディービーエム)は、電力比ではなく1mWを基準とした電力の絶対値を表しているので注意。

$$dBm = 10 \log_{10} P(mW)$$

# デシベルのトレーニング

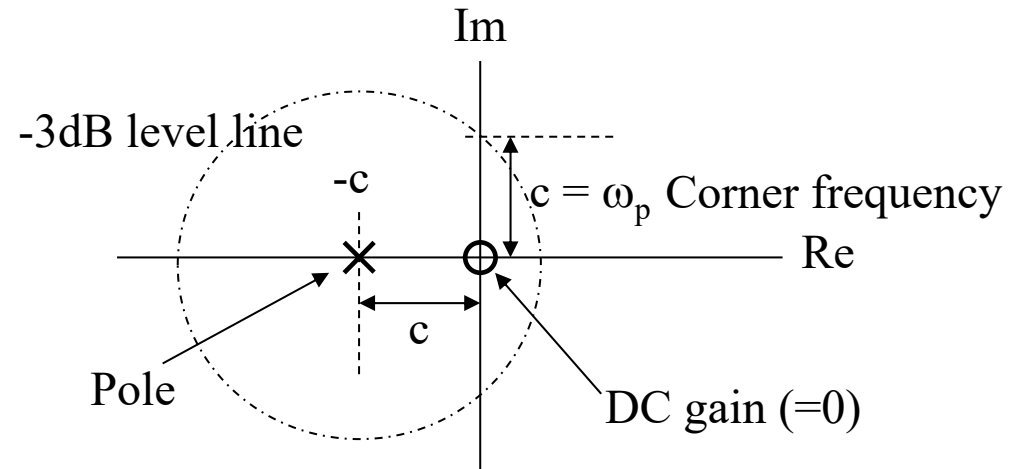
1. 増幅率100倍の増幅器のデシベルは何デシベル？
2. 増幅率1000倍の増幅器のデシベルは何デシベル？
3. 減衰率1:0.1の減衰器のデシベルは何デシベル？
4. 信号の増幅も減衰もしない回路のデシベルは何デシベル？
5.  $1/\omega$  の周波数特性を持つ回路の出力は、周波数が一桁上がる毎に、何デシベル変化する？
6.  $1/\omega^2$  の周波数特性を持つ回路の出力は、周波数が一桁上がる毎に、何デシベル変化する？
7. 100倍の増幅器を2回通ると、信号振幅は何デシベル増える？
8. 誤差が1%含まれているデータの誤差率は何デシベル？

# ポールとコーナ角周波数の位置関係

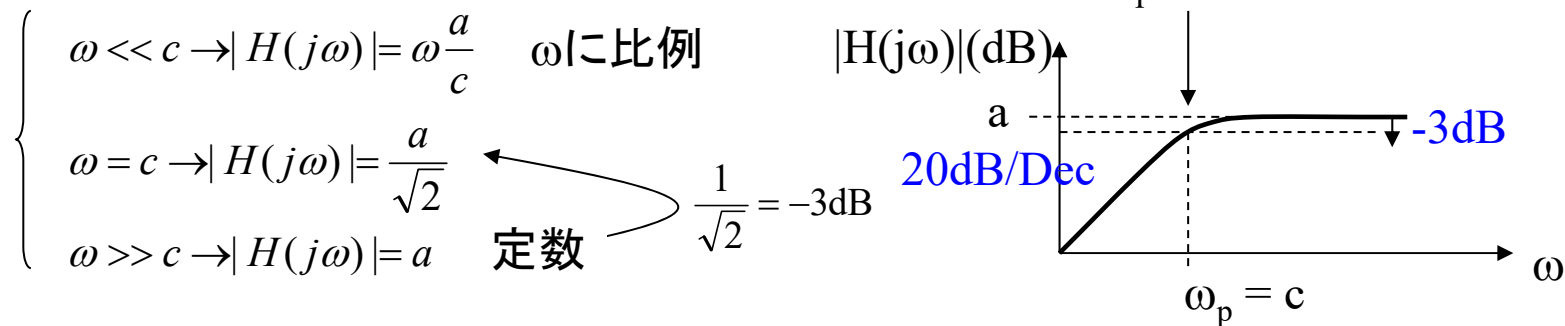
$$H(s) = \frac{as}{s+c}$$

$$H(j\omega) = \frac{j\omega \frac{a}{c}}{1 + j\frac{\omega}{c}}$$

$$|H(j\omega)| = \frac{\omega \frac{a}{c}}{\sqrt{1 + \frac{\omega^2}{c^2}}}$$



コーナ角周波数または遮断(Cut-off)角周波数 ( $\omega_p/c = 1$ )



(注意) この例では、 $\omega=0$ にもコーナがあるが横軸が対数目盛なので表示されない。 31

# コーナー角周波数

周波数伝達関数  $H(\omega) = A(1 + j\omega B) = A \left( 1 + j \frac{\omega}{\omega_z} \right)$  の場合、

$\omega = \omega_z = \frac{1}{B}$  にゼロによるコーナーが発生

$$|H(\omega_z)| = A|1 + j| = \sqrt{2}A \cong A(dB) + 3dB$$

$$\angle H(\omega_z) = \angle(1 + j) = \frac{\pi}{4}$$

どちらを無視するか

周波数伝達関数  $H(\omega) = \frac{A}{1 + j\omega C} = \frac{A}{1 + j \frac{\omega}{\omega_p}}$  の場合、

$\omega = \omega_p = \frac{1}{C}$  にポールによるコーナーが発生

$$|H(\omega_p)| = \frac{A}{|1 + j|} = \frac{A}{\sqrt{2}} \cong A(dB) - 3dB$$

$$\angle H(\omega_p) = \angle \frac{1}{1 + j} = \angle \frac{1 - j}{2} = -\frac{\pi}{4}$$



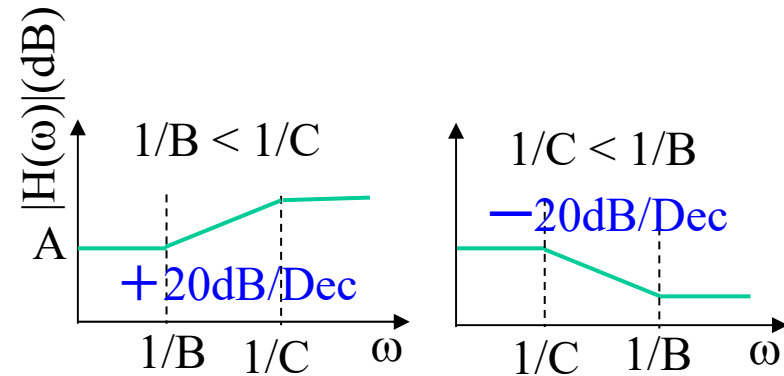
# 周波数特性の計算テクニック-1

## 1-Zero, 1-Poleの例(振幅の解析)

周波数伝達関数の分子、分母を $(1 \pm j\omega X)$ の形にすると分かり易い(できない場合もある)。

$$H(\omega) = A \frac{P(\omega)}{Q(\omega)} = A \frac{1 + j\omega B}{1 + j\omega C}$$

$$|H(\omega)| = A \frac{|P(\omega)|}{|Q(\omega)|} = A \frac{\sqrt{1 + \omega^2 B^2}}{\sqrt{1 + \omega^2 C^2}}$$



### $P(\omega)$ の特性

$$\left\{ \begin{array}{ll} \omega \ll \frac{1}{B} & |P(\omega)| = 1 \\ \omega = \frac{1}{B} & |P(\omega)| = \sqrt{2} \quad (\text{コーナー}) \\ \omega \gg \frac{1}{B} & |P(\omega)| = \omega B \end{array} \right.$$

### $Q(\omega)$ の特性

$$\left\{ \begin{array}{ll} \omega \ll \frac{1}{C} & |Q(\omega)| = 1 \\ \omega = \frac{1}{C} & |Q(\omega)| = \sqrt{2} \quad (\text{コーナー}) \\ \omega \gg \frac{1}{C} & |Q(\omega)| = \omega C \end{array} \right.$$

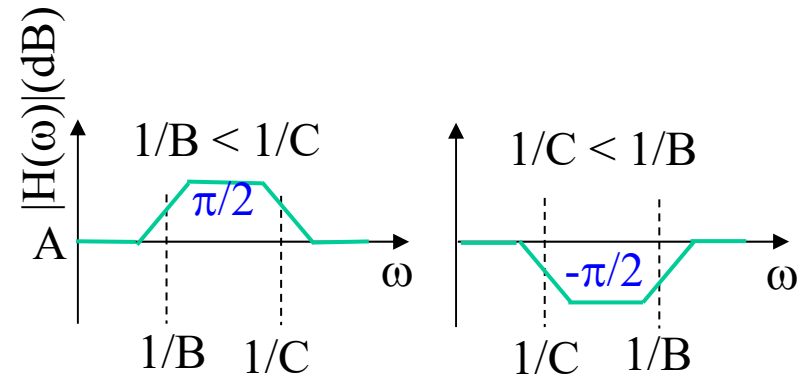
# 周波数特性の計算テクニック-2

## 1-Zero, 1-Poleの例(位相の解析)

周波数伝達関数の分子、分母を $(1 \pm j\omega X)$ の形にすると分かり易い(できない場合もある)。

$$H(\omega) = A \frac{P(\omega)}{Q(\omega)} = A \frac{1 + j\omega B}{1 + j\omega C}$$

$$= \frac{A}{1 + \omega^2 C^2} (1 + j\omega B)(1 - j\omega C)$$



### $P(\omega)$ の特性

$$\left\{ \begin{array}{l} \omega \ll \frac{1}{B} \quad \angle P(\omega) = 0 \\ \omega = \frac{1}{B} \quad \angle P(\omega) = \frac{\pi}{4} \quad (\text{コーナー}) \\ \omega \gg \frac{1}{B} \quad \angle P(\omega) = \frac{\pi}{2} \end{array} \right.$$

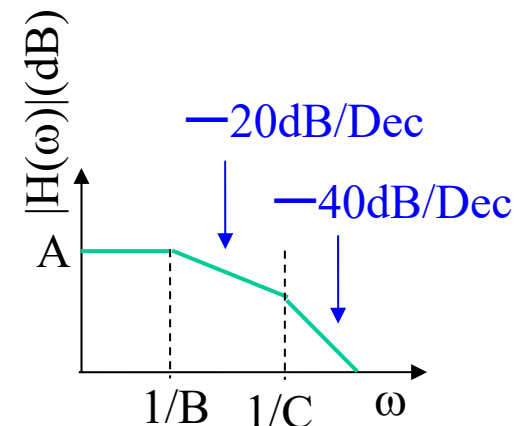
### $Q(\omega)$ の特性

$$\left\{ \begin{array}{l} \omega \ll \frac{1}{C} \quad \angle P(\omega) = 0 \\ \omega = \frac{1}{C} \quad \angle P(\omega) = -\frac{\pi}{4} \quad (\text{コーナー}) \\ \omega \gg \frac{1}{C} \quad \angle P(\omega) = -\frac{\pi}{2} \end{array} \right.$$

# 周波数特性の計算テクニック-3

## 2-Poleの例

$$H(\omega) = A \frac{1}{P(\omega)Q(\omega)} = A \frac{1}{(1 + j\omega B)(1 + j\omega C)}$$
$$|H(\omega)| = A \frac{1}{|P(\omega)||Q(\omega)|} = A \frac{1}{\sqrt{1 + \omega^2 B^2} \sqrt{1 + \omega^2 C^2}}$$



$$\left[ \begin{array}{l} \omega \ll \frac{1}{B} \\ \omega = \frac{1}{B} \\ \omega \gg \frac{1}{B} \end{array} \right. \begin{array}{l} |P(\omega)| = 1 \\ |P(\omega)| = \sqrt{2} \text{ (コーナー)} \\ |P(\omega)| = \omega B \end{array} \quad \left[ \begin{array}{l} \omega \ll \frac{1}{C} \\ \omega = \frac{1}{C} \\ \omega \gg \frac{1}{C} \end{array} \right. \begin{array}{l} |Q(\omega)| = 1 \\ |Q(\omega)| = \sqrt{2} \text{ (コーナー)} \\ |Q(\omega)| = \omega C \end{array}$$

# 周波数特性のまとめ

	Zeroによるコーナ	Poleによるコーナ
振幅特性	傾きが+20dB変化	傾きが-20dB変化
位相特性	左半面のZeroの場合 $+\pi/2$ 変化 右半面のZeroの場合 $-\pi/2$ 変化	左半面のPole: $-\pi/2$ 変化 右半面のPole: $+\pi/2$ 変化

# 電子回路が発生させる誤差(Error)

- 雑音 (Noise)
  - 量子化雑音(デジタル信号)
    - デジタル化に伴う丸め誤差
    - 信号処理により抑制できる
  - 統計的雑音(アナログ信号)
    - 電子の運動状態や密度の統計的揺らぎ
    - 原理的に抑制できない

- 歪み (Distortion)

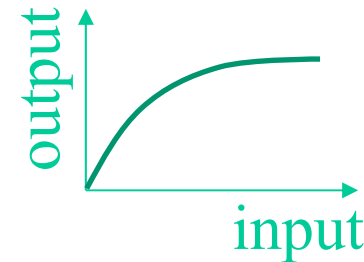
- 非線形歪み
  - 入力-出力特性の非線形性によって波形がゆがむ

- 評価指標: 全高調波歪み

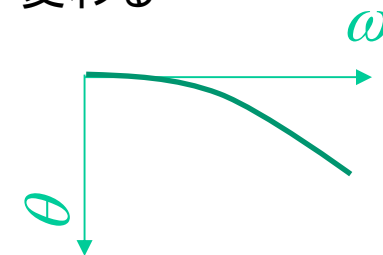
$$THD = \frac{\sqrt{\sum_{n=2} V_n^2}}{V_1}$$

- 位相歪み

- 位相の周波数依存性によって波形が崩れる
- 評価指標: 群遅延  $\tau_G = -\frac{d\theta}{d\omega}$

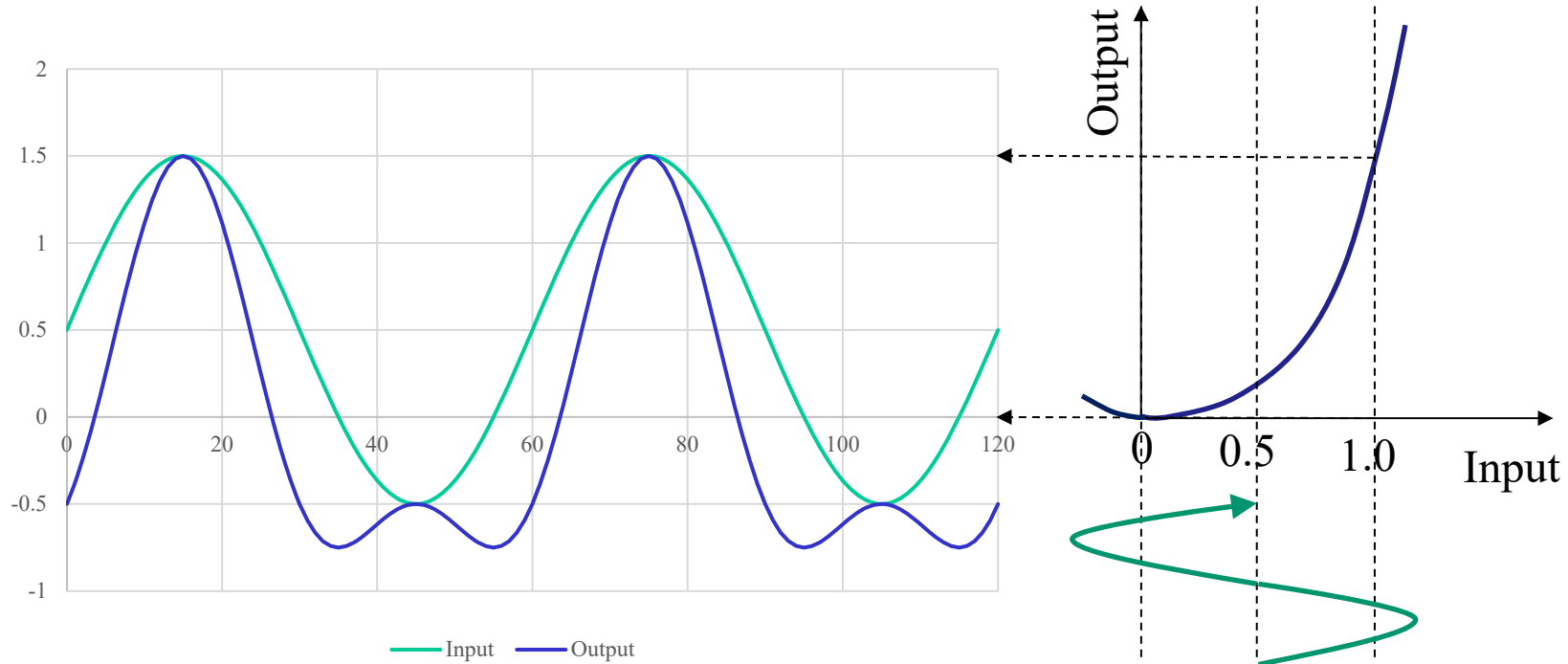


$\sin(\omega t)$ の波形自体が  
変わる



$\sin(\omega_1 t)$ と $\sin(\omega_2 t)$ 成分  
の位相がずれる

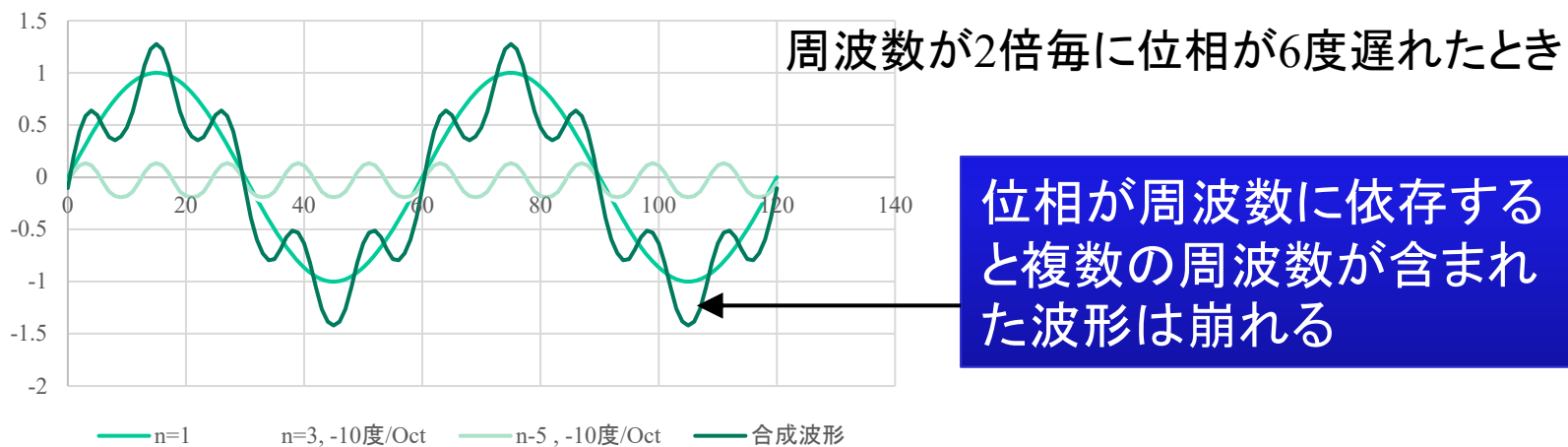
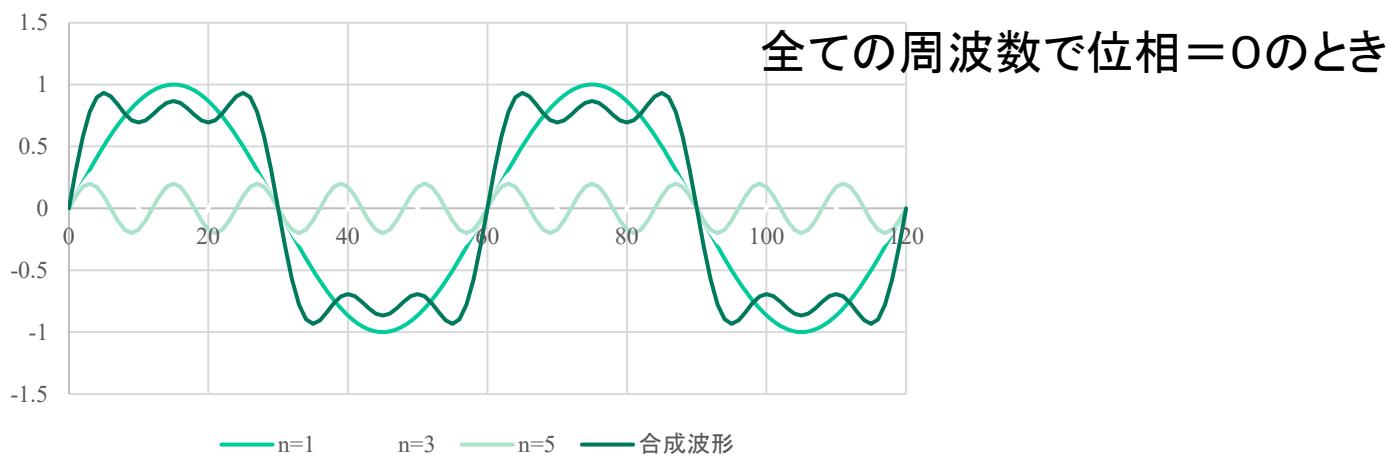
# 非線形歪み



$$x = \sin \omega t + \frac{1}{2} \rightarrow \boxed{y = x^2 - \frac{3}{4}} \rightarrow y = \sin^2 \omega t + \frac{1}{2} \sin \omega t - \frac{1}{2} = \sin \omega t - \frac{1}{2} \cos 2\omega t$$

非線形特性があると入力と異なる周波数成分(高調波)が発生する

# 位相歪み



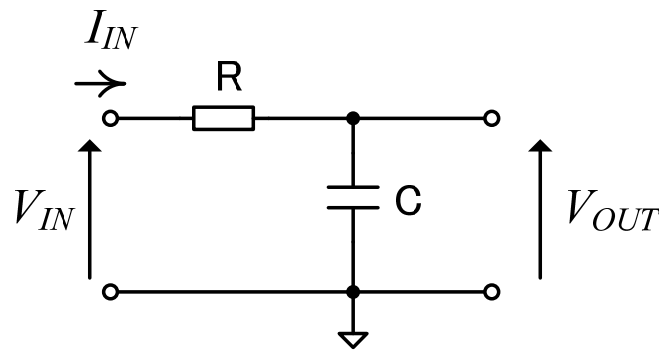
# おまけ：回路図の作成方法

- 宿題で使用するLTspiceに回路図エディタが付属しているが、図として、あまりかっこよくないので、学生実験のレポートなどでは、下記のダイアグラム作成ソフトを試してみよう。回路図の他、フローチャート、ネットワークダイアグラムなどもきれいに描けます。
- 使用法の解説ページ
  - <http://jaco.ec.t.kanazawa-u.ac.jp/edu/index.php?draw.io>

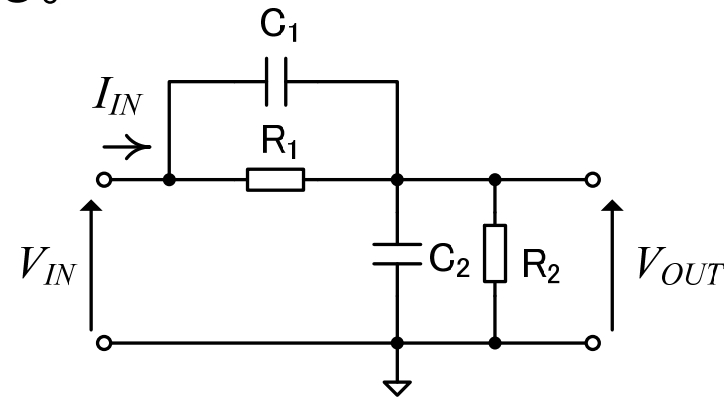


# 課題1.1

1. 下記の回路(A), (B)の周波数伝達関数とコーナ角周波数を求め、ボデー線図(振幅と位相)の概略図を示せ。ただし、周波数伝達関数は、分子と分母を  $(1+j\omega X)$  または定数の形で表すこと。
2. (B)の回路で、周波数伝達関数が定数となるための条件を求めよ。ただし、 $C_1, C_2$ は0Fではないとする。



(A)



(B)

# 1.2節のまとめ

- 回路の特性は、角周波数またはラプラス変数に対して、伝達関数で表すことができる
  - 伝達関数( $s$ 変数)
  - 周波数伝達関数( $\omega$ 変数)
  - 伝達関数は、信号処理の内容を表している
- 周波数伝達関数の特性は、ボーデ線図により表される
  - 横軸＝角周波数(対数目盛を使うことが多い)
  - 縦軸＝振幅(デシベルで表す)と位相(入出力間の位相差、度またはラジアン)
- ボーデ線図の振幅特性は、折れ線で近似できる
  - 折れ線が折れる角周波数は、コーナ周波数と呼ばれ、 $s$ 平面上のポールとゼロの位置で決定される
- 電子回路で信号処理をすると、雑音、歪みなどの誤差が発生することがある
  - 信号の歪みは、非線形性や位相の周波数依存性によって発生する